

# 特集

特集 / 地域研究の現場から

## キューバ 理想と現実、本音と建前のはざままで

山岡加奈子

### キューバ革命 分かれる評価

キューバはカリブ海に浮かぶ、人口二万人あまりの小さな国である。しかし一九五九年のキューバ革命の成功は、世界中の左翼系の人々、あるいはそれ以外の人々にも大きな期待を抱かせた。ソ連崩壊後の現在も、途上国の道端ではゲバラTシャツやポスターが売られ、先進国でも市民団体などがキューバ革命を他の社会主義国とは違った特別の制度を確立していると考え、支持を表明する。

ソ連・東欧が社会主義を捨て、中国やベトナムも共産党一党独裁を続けながら市場経済化を進めているのを尻目に、キューバは今もほぼ完全に社会主義体制を守る世界でも数少ない国の一つである。現在のキューバ経済の苦境は、自由と平等をいかにして両立するかという、世界でいまだ答えの出ない命題に対する一つの答えである。キューバに対する評価は極端に分かれる。現政権に反対してキューバを去り、米国に移住した人々の多くは、現状は悲惨であり、国民は圧制と空腹に苦しんでいると訴える。

反対に世界中の左翼系の人々にとっては、彼らの若かりし頃からの社会主義への夢を受け継いでくれているキューバ革命体制は今も変わらず魅力的らしい。

キューバに二年間住んだ筆者から見ると、キューバは今も世界の左翼系の人々の夢と期待を背負いつつ、すぐ隣の超大国米国に愛憎半ばする感情を抱き、理想と現実、本音と建前の間を巧みに動いているように映る。キューバ革命政府は、典型的なカリスマ的指導者フィデル・カストロの下に、これまで磐石の体制を維持してきた。経済的には所得格差が拡大することを極度に警戒し、社会的公正を旗印に中央集権的な経済制度を今も守っている。経済は低空飛行であるが、社会政策は非常に整備されており、今も国民全員に福利がおよぶ制度も多い。これによってキューバには最貧困層がいない。大変な犠牲を払って平等を極端にまで押し進めた成果である。

大多数の国民は、明日や来週の食事のこと、子どもの将来を気に病みながら、ラテン的明るさを演出して苦悩を表に出さない。これを見た外国人観光客は「生活が厳しい

と聞いてきたのに明るい」と思うのだ。貧しいながらも毎月ヘアカットは欠かさないし、女性たちは物不足の中で工夫を重ねて美しく化粧をし、コロンの香りを振りまきながら通りを闊歩する。毎日信じられないほどきれいに衣類を洗濯し、アイロンをかけて身なりを整える。食事を欠いても身なりに気を遣うのはラテン的な伝統だが、以前筆者はこれを「浮ついている」、「食べられないのに着飾るなんて本末転倒」と思っていた。しかし今はローマ帝国以来の伝統を受け継ぐラテン人たちの文化の高さだと思ふ。美しく身なりを整えた人たちが歩く通りは大変見栄えがするのだ。加えてスペインが最後まで放したがらなかった最後の植民地にふさわしく、ハバナの街は重厚で壮麗な建築物のオンパレードである。革命後は材料がなくてきちんと手入れされていないから一見遺跡のようであるが、趣があり、美しい彫刻やタイルが建物を飾っている。個人的にはラテンアメリカで最も美しい都市だと思っている。その美しい背景の中で、質素でも気合の入った身なりの美しい人々が行きかうのである。

年配の革命派たちは、今も革命や社会主義への忠誠を繰り返す口にするが、彼らの子どもたちは続々と国を出ており、主に米国で新しい人生を築きつつある話をよく聞く。自らの能力に自信のある若い世代は、

将来の展望の見えない祖国に見切りをつけ次々と国を出て行く。次に自信のある若者は、体制への不満はとりあえず心の中に封じ込め、体制の中でエリートコースを歩む。そこまで自信が持てない若者は、出口のない疑問に苦しんでノイローゼになるか、社会的上昇を諦め、国家が保障する最低限の社会保障に身をゆだね、精神的に怠惰となる。キューバ革命を礼賛する外国人の多くは、キューバの外に住み、自身は資本主義や市場経済の恩恵に浴しながらよその国の革命を賛美しているのである。彼らには、一度しかない人生の可能性を新天地で試みたいと思つキューバの若者たちを責めることはできない。しかしもちろん国としては本来は未来のキューバの要となるべき最も優秀な人材が流出していくのは憂慮すべき事態である。

### キューバ研究について

キューバ研究の難しさは、政府の本音と建前が見えにくいところにある。この本音と建前を見分ける力は、現地に居住しないとなかなか養つことができない。一九九〇年代に入ってから、キューバに住むことは手続きとしてはかなり簡単になったが、途

上国にしては生活費が非常にかかること、また生活そのものがかなり困難であるという問題がある。物価の多くが政府によって統制され、外貨店のみ多くの物資が集まり、不動産、自家用車などに外国人料金が設定されているため、物価は日本並みに高いと考えてよい。お金をかかずに現地に滞在するためには、それなりの体力が必要になる。たとえば移動のためには、公共交通機関の劣化が著しいため、ハバナ市内でもバスを乗り換えるたびに暑い中（あるいは寒い中）何時間も待つが、炎天下を自転車で何十キロも走るかを選ぶことになる。外貨店ですら数は多くないので、買い物にも五キロ、一キロと歩く必要があることも多い。

キューバの気候はかなり過こしにくく、首都ハバナでは平均湿度八〇%で三度を超す日本以上に厳しい夏が八カ月（三月から一月）続き、残りの四カ月は北米大陸から寒冷前線が下ってくるため、湿度八〇%のまま一度を切る厳しい冬となる。年にもよるがその中間の過こししやすい気候になる日はほとんどない。暖房はないので冬は耐えるしかないが、暑い時期にせめて冷房を利用しようとする。冷房付きの家賃が高い物件を我慢して借りるか、外貨店で日本の二、三倍の価格がつけられたクーラーを購入するしかない。このような具合で生活は率直に言ってかなり大変である。一九七〇年代から八〇年代にかけて、キ

ューバは社会主義圏以外の外国人の入国を制限していた。現在はこれに生活費の高さと生活難が取って代わった。おそらくそのために、外国人研究者で敢えてキューバに住む人はそれほど多くない。本音と建前の違いを見分けた上で、学問的にすぐれた業績をあげてきたのは、皮肉にもキューバで生まれ育つたあと米国に移住したキューバ系米国人の研究者たちである。従って、これからキューバ研究を志す人々には、時間も体力もある若いうちにまずキューバに一年くらい住んでみることをお勧めする。それによっていろいろな立場から書かれた文献を前にしても、本音と建前をより分けながら読むことができるようになるだろう。（やまおか かなこノアシア経済研究所 地域研究センター）

### 《推薦書籍》

- Domínguez, Jorge I., *Cuba: Order and Revolution*, Cambridge and London: Belknap Press of Harvard University Press, 1978.
- Pérez-Stable, Marifeli, *The Cuban Revolution: Origins, Course, and Legacy*, New York and Oxford: Oxford University Press, 1999.
- Mesa-Lago, Carmelo, *Market, Socialist, and Mixed Economies: Comparative Policy and Performance*, Chile, Cuba and Costa Rica, Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 2000.